



Osaka Gakuin University Repository

| | |
|------------------------|--|
| Title | 大学での地理教育の現状と課題－中学校・高等学校での地理学習状況の分析を中心に－ The current situation and challenges regarding geography education at university: Survey on how students have learned geography in junior and senior high schools |
| Author(s) | 杉山 伸一 (Shinichi Sugiyama) |
| Citation | 大阪学院大学 人文自然論叢 (THE BULLETIN OF THE CULTURAL AND NATURAL SCIENCES IN OSAKA GAKUIN UNIVERSITY), 71-72 : 29-45 |
| Issue Date | 2016.03.30 |
| Resource Type | Article/ 論説 |
| Resource Version | |
| URL | |
| Right | |
| Additional Information | |

大学での地理教育の現状と課題

— 中学校・高等学校での地理学習状況の分析を中心に —

杉 山 伸 一

The current situation and challenges regarding geography education at university: Survey on how students have learned geography in junior and senior high schools

Shinichi Sugiyama

1. はじめに

大学において教職課程を履修する学生は少なくない。大阪学院大学では1年次生の教職課程履修者は全学部で100名を超え、そのうち、中学校の社会科・高等学校の地理歴史科・公民科の教員免許状を希望している学生が全体の7割近くを占めている。所属学部では経済学部・法学部・国際学部の学生が多い。学生に教職課程を履修した理由を聞くと、中学・高校時代から教師になりたかったという「教員第一志望」の学生から、大学時代に教員免許ぐらいはとっておきなさいと言われて履修したという学生や、運動部での経験を活かすために、部活動の指導者として教員を目指したいといった学生など様々である。

実際に、教職課程の学生と接していると、素直で真面目な学生が多く、コミュニケーション能力も備えている。教育実習校での勤務態度や実習指導担当教諭の評価も良好である。反面、社会科の教員として必要な教科の専門性・授業力では課題も多い。特に筆者が担当している「地理学」「地誌学」に対する受講生の興味・関心は必ずしも高いとは言えない。将来、中学校・高等学校での地理の授業を担当する可能性が高いことを考えると、大学での「地理の学び方」は決しておろそかにできないことであり、地理についてしっかりと授業ができる学生を4年間にどのようにして育て上げていくかという大きな課題がある。

本研究では、教職課程を履修している学生が、中学校・高等学校での6年間を通してどのような地理の授業を受けてきたのか、そして、中高での学びの成果が大学の教職科目「地理学」にどう結びついているのかを受講生の学習状況の分析を中心に検証を進めた。具体

6. あなたは、中学時代の地理はどの程度、学習しましたか。

| |
|--------------------------------------|
| 1 日本地理と世界地理について、ほぼすべての地域・国について学んだ。 |
| 2 日本と世界の諸地域について、いくつかの地域を先生が取り上げて学んだ。 |
| 3 その他（具体的に： _____） |

7. あなたは、中学の地理の授業は楽しかったですか？

| | | | |
|---------|------|-----------|---------------|
| 1 楽しかった | 2 普通 | 3 楽しくなかった | 4 その他（ _____） |
|---------|------|-----------|---------------|

8. 中学校地理の授業は、なぜ、楽しかったのですか、楽しくなかったのですか、中学時代を振り返って、その理由を出来るだけ具体的に、わかりやすく答えて下さい。

9. 中学校での社会科の授業の好きであった順に答えて下さい。（地理・歴史・公民の3分野）

| | | | |
|------|---|---|------|
| (好き) | ⇒ | ⇒ | (嫌い) |
|------|---|---|------|

10. 高校で履修した地歴・公民科の授業で好きであった順に答えて下さい。

| | |
|------|------|
| (好き) | (嫌い) |
|------|------|

11. 地理の学習内容で好きな分野は嫌いな分野は何ですか。それぞれ1つずつ答えて下さい。また、好きな理由、嫌いな理由も書いて下さい。

| | | | | | |
|--------------------|-----------------|----------|-----------|----------|--------|
| ●分野： 1. 地形 | 2. 気候 | 3. 都市・村落 | 4. 商業 | 5. 農林水産業 | 6. 鉱工業 |
| 7. 世界の諸地域（世界地誌） | 8. 日本の諸地域（日本地理） | 9. 人口・食料 | | | |
| 10. 環境 | 11. 民族・領土 | 12. 地域調査 | 13. 地図・読図 | 14. その他 | |
| *一番好きな分野⇒[_____] | 好きな理由 [_____] | | | | |
| *一番嫌いな分野⇒[_____] | 嫌いな理由 [_____] | | | | |

12. 現在、高校では世界史が必修科目ですが、あなたが高校時代に履修してみてどう考えていますか。社会科（地歴・公民科）について、自分の考え・意見を率直に書いて下さい。

13. 自分の、今、取得予定教科についてお聞きします。中学・高校で生徒に教える上で、何が一番大切なことだと考えていますか。教科教育の視点から自分の考えを率直に書いて下さい。

| |
|----------------|
| *教科名 [_____] |
|----------------|

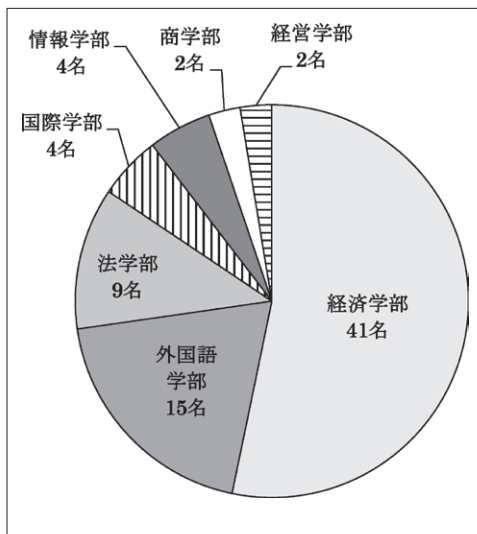
第1図 アンケート用紙「地理教育と教科教育についてのアンケート」

アンケート調査では、①調査方法（含む、調査項目）②調査対象者の特徴 ③調査結果の順で分析を行った。

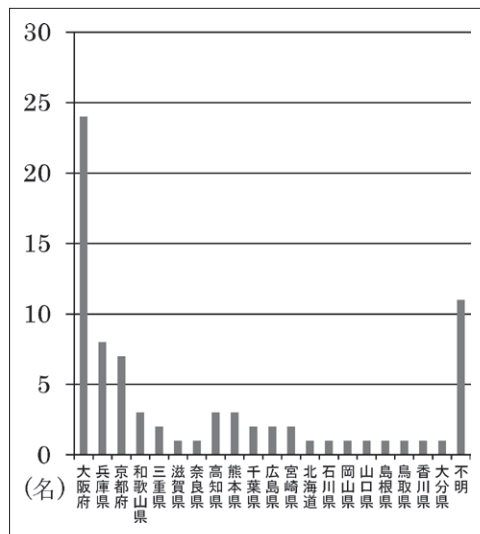
①調査方法（含む、調査項目）については、第1図に示したように、地理の学習状況について、中学校と高等学校に分けて行った。具体的には、中学校では地理授業の進め方、学習内容、授業についての印象、歴史・公民分野との比較について尋ね、高等学校では、地理の履修状況、地理以外の地歴・公民科の授業との比較について尋ねた。さらに、中・

高での地理学習の分野別の好き・嫌いについても尋ねた。

②調査対象者の特徴として、本学の学生は近畿地方を中心に、普通科出身の学生の割合が高く77名中66名が普通科出身者である。一方、77名中5名の学生が商業科・工業科の出身である。地域別に見ると、近畿地方の出身者が77名中46名と一番多いが、近畿地方以外にも一定数入学している。また、調査対象者の所属学部は経済学部が41名と一番多く、以下、外国語学部（15名）法学部（9名）国際学部（4名）情報学部（4名）経営学部（2名）商学部（2名）の順となっている。（第2図参照）（第3図参照）



第2図 学生の所属学部



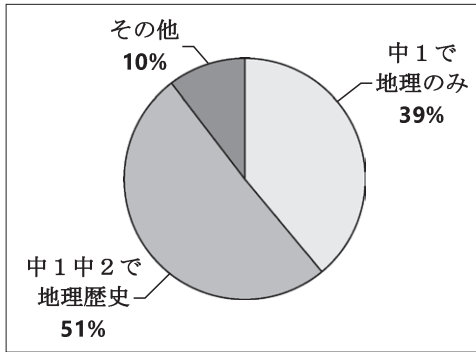
第3図 学生の出身都道府県

3. 中学校での地理の学習状況

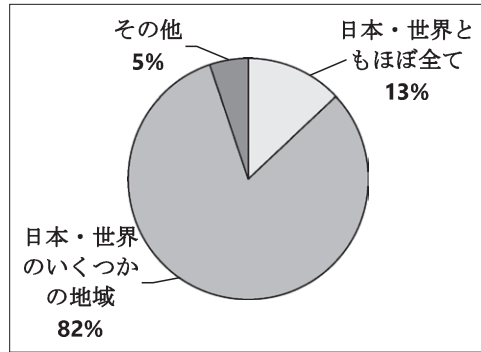
まず、中学校での地理的分野の学習状況についてアンケート結果を中心に分析した。対象の学生は大学2年生・3年生が多く、中学校在学時は1998年（平成10年）版の旧学習指導要領に従い地理的分野を学習してきた。

履修時期については、中1と中2で地理と歴史を半分ずつ学習する（パイ型）の者が77名中39名と全体の約半数の51%を占め、中1だけで地理を学習する（ザブトン型）の者が77名中30名と39%を占めている。その他については8名であった。この結果、地理と歴史を1・2年で併行して学習した者の割合がやや高い傾向にあった。（第4図参照）

中学校での地理の学習内容については、日本と世界のいくつかの地域（2～3国・地域）を学んだと答えた学生が77名中63名と全体の82%を占めている。一方、日本・世界ともほぼすべての国・地域について学んだと答えた学生は77名中10名と少なく、全体の13%に過ぎない。（第5図参照）



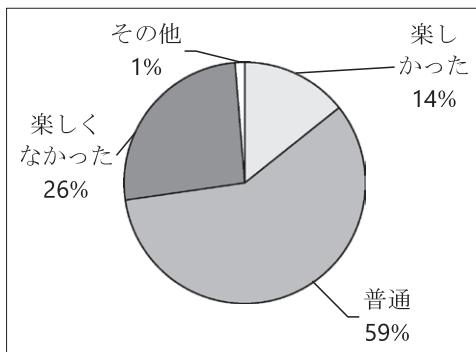
第4図 中学地理の学習時期



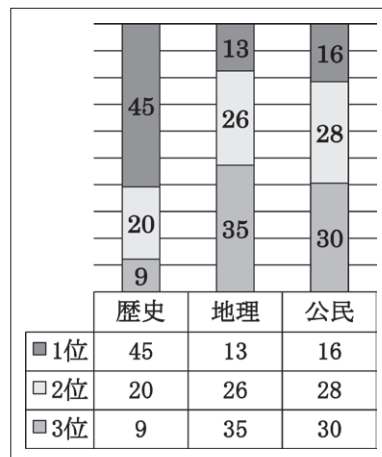
第5図 中学地理の学習内容

この結果からも明らかなように、中学校での地理学習がいくつかの国や地域についての事例学習が中心であったことが伺われる。

次に、中学校での地理の授業に対する印象・感想について尋ねた。「楽しかった」と答えた学生は77名中11名と全体の14%にとどまった。「普通であった」と答えた学生は45名、「楽しくなかった」と答えた学生は20名で両者を合わせると65名（全体の85%）と地理の授業に対する否定的・消極的な意見が大部分を占めている。（第6図参照） 続いて、中学校社会科で学習する3分野について好き・嫌いの分野を尋ねた。この結果、77名中45名の学生は歴史が一番好きと答えており、地理が一番好きと答えた学生は13名と公民の16名よりも少なく、3分野の中では最下位であった。（第7図参照）



第6図 中学地理の授業に対する感想

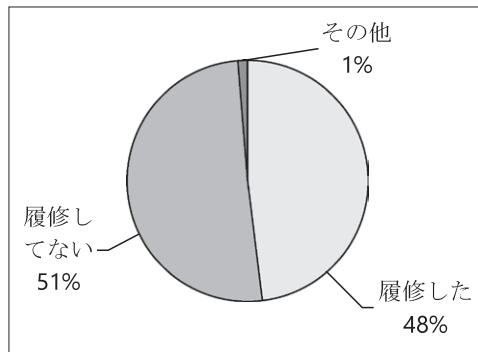


第7図 中学校社会科3分野についての好き嫌いの状況（77名中）

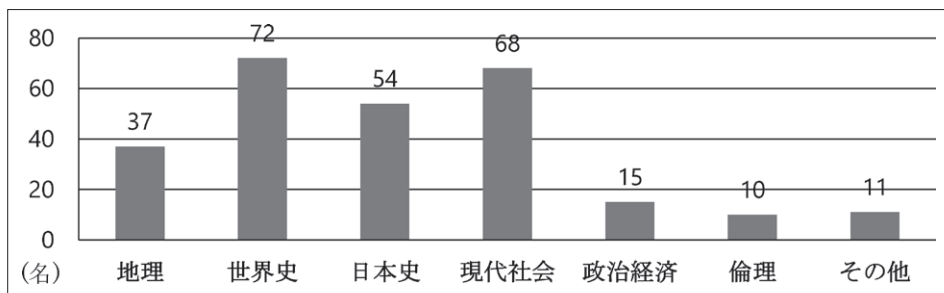
最後に中学校地理の授業について、具体的に好き・嫌いの理由を尋ねた。(第1表次頁参照) 全体を通して多かったのは「あまり興味がわかなかった。」「何をやったか覚えていない」「プリント学習中心の穴埋めばかりで面白くなかった。」といったネガティブな意見・感想であった。個々の学生に授業内容の聞き取りをして共通することは、歴史や公民の授業と比べて、地理の授業は印象に残りにくいという点である。このことは中学校だけでなく、後述する高等学校での地理の授業についても共通した特徴である。一方、少数であるが「先生が世界各地に旅行した実体験を授業で話をしてくれて楽しかった」「小さい時から地図を見るのが好きで地理の授業が苦にはならなかった。」という意見・感想も聞かれた。

4. 高等学校での地理の履修状況

次に、高校での地理A・地理Bの履修状況は、77名中37名の学生がどちらかを履修しており、履修率は48%であった。これは全国平均の地理履修率(地理A普通科2年:29%、地理B普通科3年:62%、地理A・B合計:46%)とほぼ同じである¹⁾。科目別の履修状況を見ると、必修科目の世界史を除けば、現代社会が68名と最も多く、以下、日本史54名・地理37名・政治経済15名・倫理10名の順となった。(第8図参照)(第9図参照)



第8図 高校時代の地理履修率



第9図 高校時代の履修科目 (77名中)

第1表 中学校の地理の授業について (アンケート結果の一部)

*質問: 中学校の地理の授業は楽しかったですか、楽しくなかったですか。中学校時代を振り返ってその理由についても具体的に教えてください。

回答者 58名中

プラス思考の意見 (12名)

- ・授業とは違う内容を話をしてくれて、雑談ではないが面白い話をしてくれた。
- ・地理は好きな教科でもあり、先生の教え方がとても上手で楽しかった。
- ・もともと、地理や土地に関することが好きだったので特別苦になることはなかった。
- ・旅行している感じで教えてくれたから面白かった。
- ・社会科全体に興味があったから地理の授業も楽しかった。
- ・理由はよくわからないが、地理の授業を受けると実際に行ってみたくるので興味がわいた。
- ・基本的にはプリントの穴埋めだったが、先生が授業中にプリントに記されていないことも説明してくれた。さらに受け身にならないように生徒にも答えさせるような授業だったので楽しかった。
- ・教え方が独特だった。テストに出る話よりも興味がわくような内容でメリハリがあった。
- ・板書の授業だけにならず、地図を使いながら目でわかるように理解させてくれたので楽しかった。
- ・小さいときから地図が好きだったので、(中学校の地理で)自分の持っている知識が活かせて楽しかった。
- ・地図帳を見ることは好きだった。高校よりも中学校の地理の授業があまり掘り下げてなくて好きだった。
- ・中学校の担当教員の授業が面白かった。テストの点数はよくなかったが、頑張って覚えた。

マイナス思考の意見 (39名)

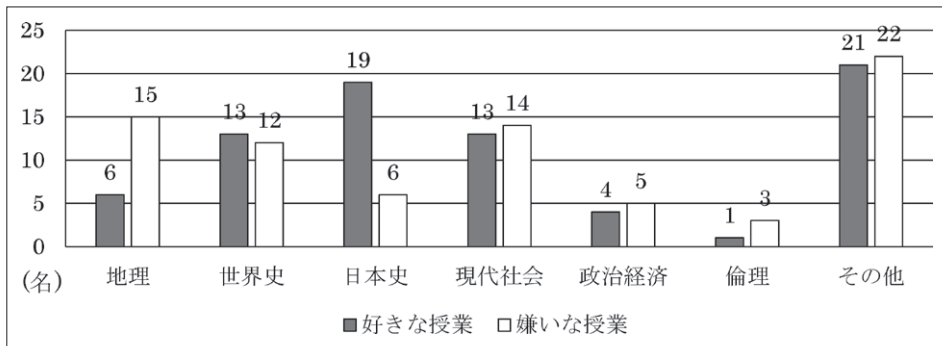
- ・ノートばかりとり説明の時間がないという授業だったので、授業についていけなかった。
- ・ただノートを取り、教科書・黒板を見て、教科書を読むだけという授業が面白みを感じなかった。
- ・地理は歴史のように関連づけて覚えるのが難しかった。
- ・地理の授業は教科書どおりやるだけだった。
- ・公民や歴史と違って、地理は授業内容に発展性がなかった。
- ・地理の授業は板書の量が多く、ノートに書くだけの授業で楽しくなかった。
- ・世界のことについて、中学生の当時はあまり興味がなく面白くなかった。
- ・地理の授業は中1の時だけなので、何をやったかあまり覚えていない。
- ・読図が出来なかったからあまり面白くなかった。歴史と地理と交互に授業があったが、歴史の方が好きだった。
- ・覚える量が多すぎて途中から面白くなくなった。
- ・地理の授業がわかりにくく面白くなかった。
- ・歴史は興味があったが、地理には興味がなかった。
- ・地理は興味がなく楽しかった覚えがなく、どちらかといえば面白くなかった感じがする。
- ・中学校の地理の授業はあまり記憶にない。
- ・地理の授業は板書と白地図の作業をしたことしか覚えがない。
- ・先生が一人で授業を進めていた感じがして面白くなかった。
- ・中学の地理の授業はあまり記憶に残るようなことがなかった。
- ・中学生当時、ニュースに興味湧いていなかったため、地理を学ぶ意味がわからなかった。中学校でアメリカについて学んだが、日本人である自分とどう関係しているのかわからなかった。扇状地などの話は本当にどちらでもよかった。
- ・地理の授業は先生の説明が難しく、理解できなかった。
- ・中学校の地理の授業で、日本の都道府県と世界の国名をひたすら書いて、場所と名前を覚えさせられたから楽しくなかった。中学生の時は地理は覚える教科なのだと思っていた。
- ・地理でどんなことをやったか覚えていない…くらいつまらなくて覚えていない。ただ自分も学習意欲がなかったからだと思う。先生は授業で毎回プリントを用意して自分の住んでいる地域について地図を使って説明されていたので自分の頭に入っていなかったのだと思う。
- ・日本の都道府県については興味があったが、世界のことになると全く理解できなかった。
- ・地理の授業のイメージがしにくかった。「強制的に覚えろ」という授業であった。
- ・中学校の地理は、わかりにくくて難しく、あまり楽しくはなかった。
- ・中学校の地理は授業というより作業のような形でやらされていた。地図を作成したり等高線を書いたりする授業が毎週だったので楽しくなかった。
- ・歴史に興味は偏っていたため地理に興味はなかった。
- ・地理は覚えるのが大変というイメージがあったので、あまり楽しくなかった。

プラス思考・マイナス思考
両方の意見 (7名)

- ・地理 = 暗記。暗記が苦手だったので社会科自体が苦手だった。中学校での授業の記憶はないが、高校の地理の授業は、先生が世界各国の旅行をした実体験を話してくれたので非常に楽しかった。
- ・イタリア、ドイツ、アメリカなど有名な国の話は面白かったが、バルト三国などのマイナーな国はイメージできず覚えにくかった。また、日本の地理はある程度学習したが、細かくなるとややこしくて嫌だった。
- ・地理の先生は面白かったけれど、内容的には覚えるだけのよう感じがした。
- ・地名は覚えることが好きであったが、気候や世界の工業などはわからなかった。
- ・もともと社会科は得意な方だったので、別に苦ではなかったが、地理はあまり好きではなかった。だから、何となく授業を聞いていたので印象的なことしか記憶に残っていない。
- ・地理の中でも自分の好きな分野は楽しいと思えたが、苦手であったり興味のない分野は中々頭に入らなかったのが楽しくなかった。
- ・興味がないわけではないが、個人的に地理が得意でなかったのであまり楽しくなかった。日本の地理はすでに知っていることもあり、まじだったけれど、世界の国々のことになると知らないことが多すぎて面白くなかった。

このことは、半数の学生については、中学1年生・2年生で地理を学習してから、5年～6年間は「地理学習をしていない空白期間」であることを意味しており、世界地理・日本地理に関する基礎的な事項を忘れており、詳しくは注記する世界の都市名・国名・首都名のテスト結果からも明らかなように、世界の国・地域の地理的位置についての知識が不足していることと無関係でないと思われる²⁾。

高校で履修した地歴・公民科目の中で一番好きな授業は何であったかを尋ねたところ、日本史19名、世界史13名、現代社会13名、地理6名、政治経済4名、倫理1名の順となっている。反対に、一番嫌いな授業については地理15名、現代社会14名、世界史12名、日本史6名、政治経済5名、倫理3名の順となっている。この結果から見て、先述した高校の履修科目とほぼ同様の傾向が見られ、高校で地理を履修した学生についてもあまり地理の授業は好きではなかったという状況が読み取れる。(第10図参照)



第10図 高校地歴公民で一番好きな授業・嫌いな授業 (77名中)

第2表 高等学校で履修した地理歴史科・公民科について (アンケート結果)

*質問：現在、高校では世界史が必修科目ですが、あなたが高校時代に履修してみてどう考えていますか。地歴・公民科について、自分の考え・意見を率直に書いて下さい。(自由表記)

(※順不同 原文のまま記載)

- ・世界史は1年しかやっていないため、内容があやふやである。今思うと、世界史の方が(他の地歴・公民科の科目と比べて)日常生活上の話題によく出てくるため、世界史を主に勉強するべきだと思う。
- ・世界史・日本史はストーリーがあって面白かった。
- ・現代の日本を知るためには過去を知らなくてはいけないので、日本史を学習するのは賛成だ。世界史もどうやって他国が日本と関係を築いてきたのかを知るためには必要だと思う。地理については、まず、地理を(生徒が)好きになってもらうことが一番である。それには、生徒が興味を示すような地理の授業内容が必要となってくる。
- ・私は世界史・日本史・地理は苦手だった。逆に、現代社会は面白みを多少は感じる事が出来た。
- ・先生にもよるが、高校では地歴・公民ともわかりやすい授業が少なかった。
- ・世界史はかなり難しかった。覚えることが多すぎた。高校の地歴・公民科については、生徒が「考える力」と「興味」をもってもらえる事と、教師が生徒に対して「伝える力」をもっと持つ必要が大切だ。
- ・グローバル化の時代になり、世界史が必修になっているのはわかる気がする。ただし、地理的な学力も世界の場所を知っておく上で必要なことだと思う。
- ・地歴科は先生によって興味の持ち方が変わるので、まずは先生が興味を持って生徒に教えることが必須。
- ・高校時代、社会科の教員になりたいとは思ってなかったので、(授業の事は)あまりはっきりとは覚えていない。ただ、板書をノートに写していただけなので知識としては少ししか頭に入っていない。
- ・地歴科は先生の力量・引き出しの大小によって授業の内容が全く変わった。

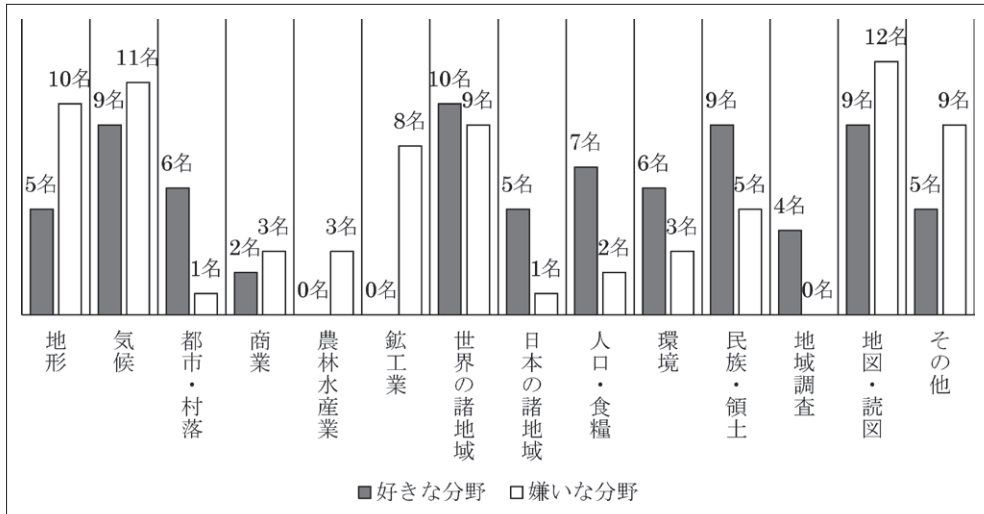
- ・高校の地歴科は全体に覚える量が多い。特に、世界史は時代の流れがつかみにくい。
- ・世界史は必修だが、日本史が必修でない理由がわからない。世界というもののつながりは、全ての地歴科で学べると思う。歴史を学び現代を学ぶ。(逆もしかり) その上で地理を学ぶ。地理を学ぶというのは自分が今生きている世界を学ぶことだと思う。
- ・地歴科の授業はプリント学習が多かったような気がする。プリント学習ばかりでなく、教科書や新聞記事などを使って、生徒が興味を持つような授業をすることが大切だ。
- ・私は文系で世界史はずっと学んでいたのですが、しなければならないという意識しかない。暗記科目というイメージしかなかった。歴史は穴埋め学習が多く、私もそのような授業を受けてきたがあまり頭に入らなかったりで面白くなかった。
- ・高校では興味がなくなった途端に、授業を受ける気がなくなった。まずは生徒が興味・関心をなくさせない授業にすることが一番ではないか。
- ・世界史は初めて学ぶことだったので新鮮でウキウキしていたと思う。カタカナがほとんどなので漢字をあまり覚えなくて良かったが、地理が全然理解できていなかったで、場所が全くわからないままに世界史の勉強をしていたと思う。
- ・世界史と日本史をつなげないと世界史を必修にした意味がない。歴史はただ暗記させるのではなく、何故そうなったのかということを生徒に理解させることが必要。地理は生徒を受け身にさせず、自分で思考させる指導が必要。
- ・私は世界史が必修よりも、日本史・地理を必修にして学ぶ必要があると思う。社会科＝暗記科目という授業展開にならないように(教師側が)心がける必要があると思う。確かに覚える科目ではあるが、語彙だけを覚えるのではなく、しっかりと流れをつかんで理解させ、その中で教科の楽しさを伝えることが大切になると考えている。
- ・世界史については、正直、コアな部分をやりすぎている感じがするので、あまり必要がないと思う。
- ・現在、世界中で様々な問題が発生している。国際紛争や民族問題など、これらは現状を理解するだけでは不十分で、その問題の原因・要因などを知る必要がある。そのために、高校で世界史を学ぶことはプラスになると考える。
- ・私としては社会科(地歴・公民科)の授業は先生の個性が非常に出てくると思う。私が中学校・高校時代の先生は教え方がバラバラであった。教え方が上手な先生もいれば下手な先生もいる。しかし、それで良いと思う。地理については、最低限の国名や都道府県などの知識は絶対に必要である。私自身地理が苦手で、今、大学の授業で非常に苦労しているからである。
- ・現代はグローバル社会なので、世界史を必修にすることは良いと思うが、授業でもっと現代に近い世界史を中心にするべきだ。何千年前のことよりも何十年前の歴史をくわしく教えるべきだと思う。
- ・地理は知っている日常生活で役に立つことが多いので、高校時代にしっかりと勉強しておく必要がある。
- ・高校での地歴科の授業は覚えるだけの授業になってしまいがちだったので、もっと授業に工夫をしてほしいと思った。
- ・高校で地理は必修にすべきであると思う。現代を生きる私たちにとって地理は生活につながる人が多い。そのことを考えると、世界史は必修科目に入れなくて良いのでは……と思う。
- ・地歴科の科目は中学・高校とそんなに内容は変わらなかった。ただ、高校では中学校より少し奥深くまでしたと思う。

5. 地理学習の分野別に見た好き嫌いの状況

これらの中学・高校での地理学習の状況を踏まえ、学生が学んできた地理学習の中で、どのような内容が好きであったのか、嫌いであったのかを学習分野ごとに比較した。(第11図参照)

そこで、受講生の中には中学校で学習した者と、中学校・高等学校を通して学習した者がいるため、ここでは両者の全体的な傾向について分析することにした。

地理学習の中で、好きな分野について尋ねてみると、特定の分野に集中することなく、かなり分散した状況が見られた。「世界の諸地域」が77名中10名と最も多く、「気候」「民族・領土」「地図・読図」が各9名と続いた。反対に、「農林水産業」「鉱工業」の分野が好きだと答えた学生は0名であった。一方、嫌いな分野について尋ねてみると、特定の分野に集中している状況が見られた。「地図・読図」が77名中12名と最も多く、「気候」が11名、「地形」が10名と続き、全体的に自然地理的な内容について嫌いな傾向が強い。また、「気候」「地形・読図」「世界の諸地域」については、好きな分野と嫌いな分野の両方で



第11図 地理の学習内容で好きな分野・嫌いな分野 (77名中)

多いという傾向も見られる。そこで、なぜ中学校・高等学校で地理の授業が好きではなかったのか、学習内容・授業スタイルから整理・検討した。

中学校・高等学校を通して授業内容について共通する意見としては、プリント学習が主体で空欄部分の穴埋め作業が多く、先生が答えを板書したものを生徒が写して暗記する授業スタイルが大部分を占めていることである。この授業スタイルをすべて否定するわけではないが、少なくとも学んできた学生の話聞く限りは、あまり肯定的な意見を聞くことはできなかった。地理の授業構成は、歴史や公民の授業と違って、一貫したストーリー性のないものに終わっていて平板だと認識している学生が多い。そのため、授業ごとに、生徒たちが興味・関心を持てるような探求的な学習内容が必要であるにもかかわらず、現実には教科書の太字項目を答えさせる授業に終始している。また、中学校で学習した地理学習の内容と高等学校で学習した地理学習の内容に大きな違いがなく、同じことの繰り返しではないかという意見も多数聞かれた。(第2表参照)

高等学校で地理が必修科目でない現状では多くの生徒(第8図参照)にとって、中学1年生と2年生の地理的分野で学習するのが「最後の地理学習」であるという点も見逃すわけにはいかない。そのような中で、教職課程を履修している学生に中学校時代の地理の学習スタイルについての感想が多かったことは、先述したようにプリント穴埋め学習が主体で、板書事項をノートに写し、太字部分を暗記するというものである。「地理＝暗記科目」というイメージが依然として強く、大学生になった現在でもそこから脱却できていない。

新学習指導要領では中学校地理的分野の改訂で「動態地誌的な学習による国土認識の充実」が掲げられているが、現場で教えている教員がどの程度理解し、意識して授業に臨ん

でいるかといえかなり厳しい現状ではないか。実際に、中学校現場で地理を教えている教員に聞いてみても「地理は歴史と違ってストーリー性に乏しく教えるのは難しい」「教科書の見開き2ページに書かれていることを50分間の授業で体系的に教えるのは大変だ」という意見をよく聞く。日本の諸地域について九州地方から北海道地方まで7地方を「自然環境」「他地域との結び付き」「環境問題・環境保全」「産業」「人口や都市・村落」「生活・文化」「歴史的背景」のそれぞれの視点に焦点をあてて学習するという授業展開は地理学専攻の教員であっても難しい。これまで「静態地誌的な学習」が主体であった地理の授業から、「身近な地域」を「動態地誌的な学習」に移行することによって、生徒に実感を持たせた地域的特色をとらえさせることがどれだけできるのか。限られた授業時間内で生徒に伝え、理解させるには様々な授業の工夫が必要となってくる。

6. 地理の授業についての学生の考え・意見

教職課程で地理学・地誌学を受講している学生に、中学校・高等学校で地理の授業について今後どうすればよいのか意見を聞いてみた。はじめに、大学で地理を受講して、改めて地理の魅力はどこにあるのかを学生たちに思いつくままに書いてもらうことにした。その中で、地理の魅力を肯定的にとらえる意見として以下のような内容が見られた。

- ・地理の魅力として、何気に生活している地域にも特色が必ずあり、歴史や公民の学習と比べると最も身近な分野であると考え。自分が生活している中で、実際に肌で感じ取ることができる「身近さ」が地理の一番の魅力であると思う。
- ・地理の魅力として、まず、地図を使って世界の国や自分の住んでいる地域の情報が把握できる。また、そこから視野を広げ、他の国や地域の文化の違いなどを知るとともに、なぜ、文化の差が生まれたかという歴史的背景や自然環境の違いについても触れることができる。
- ・地理の魅力は幅の広さだと思う。考え方の面でもそうで、一つの見方に限定して考えるのではなく、地形や産業、文化などいろいろなことを総合的に考えていくことができる。そういう（地理的な）見方・考え方というのは、生きる力にもつながり、これからの人生のうえでもプラスになるのではないか。
- ・地理の魅力は非常に範囲の広い学問である。何をテーマにしても地理として追求することが可能になってしまうので、地理には終わりはないと思う。また、地理は空間認識能力が高く要求される分野であると考え。例えば、千里ニュータウンを調べる際にも千里ニュータウンの規模や範囲などが複雑に関係してくる。そのような意味で私は地理の学問分野は範囲が広く、空間認識能力がいると思う。
- ・私が考える地理の魅力は日常生活にいかせることである。大学で地理学や地誌学の講義を受け、世界の諸地域の特徴や地図の見方、日本の各地方の特産品や様々な地理に関する

る知識を学び、そのことが日常生活に結びついていることに気づくことができた。

- ・私自身が感じたことは、日本は広いと思いきや、地理を学んで世界と比べれば日本はとても小さく、世界にはさまざまな人々がいることを知り、視野をもっと広げようと思った。地理の魅力は実際に現地に行かなくても、地図や教科書を読むことによって居ながらにして世界や日本の良いところ・悪いところが知れるのが一番だと思う。
- ・地理は歴史的視点、公民的視点など様々な視点とつながられることが大きな魅力だと思う。なぜ、その場所でその出来事が起こったのか、なぜ、そこが中心となって政治を行うのかなどと、様々なことが地理と関わっている。また、地理を通して、日本のみならず、世界各国を比較してみることで日本の経済発展や今後の改善にもつながる非常に重要な科目となるのではないかと考える。私がボランティア活動で現在考えている企画が「気仙沼の子どもたちと、気仙沼の良いところ探し」というものである。気仙沼にはユネスコスクールがあり、他の地域とは違った形で復興を目指しているということもあり、次の世代を生きていく子どもたちと（気仙沼の）良いところを探して、新たな街づくりをしていこうという企画である。これにも大きく地理が関連しているので、こういった実社会に役立つところも地理の魅力の一つになるのではないかと思う。

一方で、地理の魅力について否定的にとらえる内容もいくつかの意見の中に見られた。

- ・地理の魅力は正直よくわからない。中学・高校と地理を学習してきたがあまり印象が残っていない。中学・高校の地理の授業形態も一問一答のようなプリントをひたすら解くような感じであったので面白くなかった。
- ・地理の魅力は、歴史や公民と比べれば中々伝わりにくい。歴史では時代の流れの中で、公民ではニュースや新聞記事を通して面白さを感じ取ることができたが、地理ではストーリー性に乏しく、地形や気候、地域ごとに分かれてしまっているのがあまり身近に感じにくいし難しい。

この地理に対して否定的にとらえている2つの代表的な意見に対して、この現状を変えていくには具体的にどうすればよいか、大きな課題を突きつけられている。地理教育に携わる者としては真摯に受け止め、課題解決の糸口を探っていく取り組みを大学の地理教育の中でも実践していかなければならない。

7. 学生が期待する地理の授業

このような状況の中で、教職課程で地理学・地誌学を受講している学生に、中学校・高校で地理の授業を行うことを想定して、具体的にどうすればよいのかを聞いてみた。その結果、以下のような意見・提案が得られた。

- ・生徒の頭の中に残るような授業の工夫をすること。教科書の太字部分をプリントやノートに書き写して覚えることの繰り返しの授業ではこの先役に立たない。

- ・まずは、ただの暗記科目にならないことが大切である。自分自身、地理は暗記科目だと思っていたので、テスト前に詰め込んで解答し、終わったら忘れるという形の繰り返しであった。それでは、その生徒にとって何も残らないし知らないままに生きていくことになると思う。また、地理のみ教えるのではなく、歴史と関連づけて教えることが大切ではないか。
- ・個々の国や地域、都道府県を取り上げて授業をするのも一つの方法ではあるが、それをするよりもまず、どこに何があるのか、国や地域がどこにあるのかを地図を見て、生徒が答えられるような授業をしっかりとしていくべきではないか。
- ・地理は日常生活に直結した科目である。自分の住んでいる地域の特性や他の地域との違いについて学ぶことは苦痛ではなく好きなので地理の授業は楽しい。地理の授業を受けたら、実際に行ってみたくなるような興味・関心をまず生徒に持たせるような授業にすべきではないか。
- ・地理の魅力は幅の広さだと思う。1つの国や地域を地形や歴史、産業、文化などいろいろなことを総合的に考えていくことができる。
- ・地理の授業を行う上でのポイントとしては、まず、現代社会に生きている自分たちがどのような問題に直面しているのかを中心に教えていきたい。地理として必要な内容を学習していくのは当然であるが、一人の人間として現代に生きているということを意識するためにも、もう少し現代社会と結びつけた地理を工夫・追求していくことが大切ではないか。

学生たちの多くが認識している中学・高校での地理に対するイメージは「プリント穴埋め学習主体で、断片的な知識の羅列を教師側から一方的に覚えさせられる暗記科目」というものである。しかし、一方で地理は日常生活に直結した科目で、大学での学部の授業にも役に立つという認識も高い。中学・高校で学んできた「地理に対する固定化された先入観・イメージ」をすぐに大学で払拭することは困難と考えられる。しかしながら、大学での地理学に関連した科目の中で、講義やフィールドワークを通して徐々にほぐしていくことは可能ではないか。筆者は地理学に関連した科目を担当し、社会科・地理歴史科教員を目指している学生に接し、授業を通して様々な意見・本音を聞いてきた。彼らから得たものは大きい。それは、中学・高校時代には地理はあまり好きではなかったけれども、大学で地理を学ぶことによって、日常生活において非常に密接な関係があり、役に立つ「有用な学問」であることを学生自身が再認識したことである。大部分の学生は中学・高校で地理を学習して、何が役に立ち、何が面白いかというところが見えてこないままに学習を終え、大学へ入学してきた状況にある。この状況を払拭する手立てを大学の地理のカリキュラムに取り入れて改善していくことが急務の課題である。

地理学・地誌学を受講した学生に高校の地理学習について感想を聞いてみても、高校での地理学習が中学校で学習したこととあまり変わらず新鮮味がなく面白くなかったという

意見が多く寄せられた。そして、大部分の学生は中学校・高校の6年間を通して学習してきた地理学習の成果が見えないままに大学へ入学してきている。

地理学を専攻した先生だから良い授業が出来るとは限らないが、受講学生からは、「中学・高校でもっと中身の濃い授業をして欲しかった」「教科書の流し込みやプリント学習だけではなく、地理をもっと専門的に教えてくれる色々なバリエーションを持った授業を受けていたら興味をもてたのではないか」という指摘があった。また、地理的な興味・関心をもてる題材を生徒から引き出し、生徒主体の地理の授業を教師が創り上げていくことによって、生徒の地理に対する意識も変わっていくのではないかという前向きな意見もあった。

大学に入学して、経済学部・国際学部・法学部などに所属し、学部の専門教科や社会科の教職科目を受講すると、多くの学生が、中学・高校時代にもっと地理を勉強しておけば良かったと地理の知識が必要だと改めて実感している。学部は違っても、地理の内容は大きく関わってくると認識している。学生たちは大学生になって地理を学び、改めて地理の重要性に気づいている。高校で地理を履修した・履修しなかったというだけの問題ではなく、小学校・中学校・高等学校で学習してきた地理学習の成果をもとに、大学での地理教育の再構築を早急に取り掛かるべき時期にきているのではないか。特に、中学校社会科地理的分野、高校地理歴史科の教員免許を取得する学生にとっては、4年間の大学での学びの実践をいかに積み上げていくかが重要な鍵となる。

8. むすびにかえて

受講生の中学校・高等学校での「地理」の学び方を踏まえて、大学での「地理学」の授業はどうあるべきか、地理を専門としない学生に対して出来ることは何か、これまでの授業実践を通して得られたことを整理すると以下の様に要約できる。

- ・受講生が中学校時代に学んできた地理的分野の学習内容については、プリント穴埋め学習主体の暗記科目の印象が強い。
- ・大部分の学生が地理に対してネガティブな意見・感想を持っており、あまり印象に残っていない。
- ・地名や地理的位置の認識・理解についても不十分のまま終わっている傾向が強い。
- ・高校での地理履修率は全国平均と比べてそれほど低い状況ではないにも関わらず、高校での地理学習が中学校で学習した内容の繰り返しであるととらえている学生がかなり多い。
- ・中学校・高校を通して、歴史や公民と比較して、地理が好きな科目と答えた学生の割合は低い。全体的には概ね、中学校では、歴史⇒公民⇒地理の順で好き嫌いの傾向が見られ、高校では、日本史⇒現代社会・世界史⇒地理⇒政治経済⇒倫理の順で好き嫌いの傾

向が見られる。

- ・分野ごとの好き嫌いの傾向として、中学校・高校を通して「地図・読図」「気候」「地形」といった自然地理の分野について苦手な傾向が見られる。「世界の諸地域」「気候」「読図」については好きな分野・嫌いな分野の両方で多いという傾向も見られる。

以上のことから、地理に対する印象として、断片的な知識を羅列して覚える暗記科目というイメージが払拭できないまま今に至っているという学生が多い。また、これまでの中学・高校での授業スタイルがプリント穴埋め学習主体で、面白みに欠けるものであるという固定されたものがある。そのため、覚えても忘れてしまっていて継続性がないまままで終わっていて、地理学習の定着が十分にできていない。

しかしながら、地理学や地誌学の授業を続けていく中で、これまで地理にあまり興味・関心を持てなかった学生でも、教え方次第で地理に対する苦手意識やネガティブな見方を徐々に変えていくことは十分に可能であると考えている。その際に、以下の点に着目してこれからの教職課程における地理学関係科目の授業計画・授業内容を提案したい。

- ① まず中学校・高校までの地理の固定されたイメージ・先入観を大学の初年次（1・2年）で取り除く授業を構築すること。
- ② 地図帳・新聞記事・フィールドノートの活用を徹底することにより、社会への関心を持つことを習慣づけること。地名・国名・位置確認・世界情勢・身近な地域の話題等については絶えず各自で独自のアンテナを張らせていくことが大切である。
- ③ 高校での地理を未履修であることを前提に授業を考えていくこと。地形図の色塗りや読図など、作業を伴う地図学習については意外に興味・関心を示すことを実感した。
- ④ 地誌中心の模擬授業を出来るだけ実施すること。教職課程においては、世界地誌や日本地誌の模擬授業の実践は効果的である。自分でチョークを使って板書や手書きの地図を書かせることの経験を積ませることは大切である。
- ⑤ 身近な地域のフィールドワークを出来るだけ経験させること。これまでも、大学での地理教育におけるワンポイント巡検の大切さが指摘されてきたが、大学の授業時間内に出来るだけ多くの地域を見ることは、たとえ短時間の経験であっても「地理的な見方・考え方」を学ぶ上では非常に大切なことである。特に、全体を俯瞰してものごとを大局的にみる姿勢、いろいろな地域を比較しながら、その地域が持つ特性や性格を自分なりに分析していく手法は地理学を学ぶ上で必要な力となり得る。
- ⑥ 何よりも、地理は実学で日常生活にも、他の学問を学ぶ上でも非常に役立つものであるという認識を学生たちに持たせること。難しいことを教え込ませることよりも、まずは、身近な地域についての疑問や問題点を自分たちの視点で考えさせるように教師側が適切なアドバイスをしていくことが第一である。

付 記

本論は、2014年10月の第8回全国地理教育学会全国大会（於・大阪商業大学）において口頭発表した内容に加筆し、修正したものである。

注

- 1) 文部科学省ホームページ 資料1-2 高等学校における必履修教科・科目について.
- 2) 地理学・地誌学の受講生22名に対して、以下の10都市の位置する国名と、その国の首都名について答えさせる簡単なテストを実施した。

| | | | |
|----------|-----------|-------------|-------|
| ①イスタンブール | ②ケープタウン | ③サンクトペテルブルク | ④シドニー |
| ⑤シャンハイ | ⑥ニューヨーク | ⑦バルセロナ | ⑧ミラノ |
| ⑨ラホール | ⑩リオデジャネイロ | | |

その結果、以下のような状況であった。(全22名中)

| | | |
|-------------|-------------|--------------|
| ①イスタンブール | 国名正解者 (6名) | 首都名正解者 (1名) |
| ②ケープタウン | 国名正解者 (5名) | 首都名正解者 (0名) |
| ③サンクトペテルブルク | 国名正解者 (0名) | 首都名正解者 (0名) |
| ④シドニー | 国名正解者 (17名) | 首都名正解者 (4名) |
| ⑤シャンハイ | 国名正解者 (22名) | 首都名正解者 (19名) |
| ⑥ニューヨーク | 国名正解者 (22名) | 首都名正解者 (17名) |
| ⑦バルセロナ | 国名正解者 (11名) | 首都名正解者 (7名) |
| ⑧ミラノ | 国名正解者 (18名) | 首都名正解者 (11名) |
| ⑨ラホール | 国名正解者 (0名) | 首都名正解者 (0名) |
| ⑩リオデジャネイロ | 国名正解者 (20名) | 首都名正解者 (7名) |

参考文献・資料

朝日新聞2005年2月23日朝刊「大学生 イラクどこ? 4割が不正解」(東京本社発行版).

読売新聞2008年3月20日朝刊「宮崎57% 宮崎どこ?」(東京本社発行版).

文部科学省ホームページ 資料1-2 高等学校における必履修教科・科目について.

山口幸男 編著 (2011):『動態地誌的方法によるニュー中学地理授業の展開』明治図書.

深見 聡・井出 明 編 (2010):『観光とまちづくり-地域を活かす新しい視点-』古今書院.

小林正人 (2012): 高等学校地誌学習の今後の方向性. 新地理60-1, pp.19-23.

大学での地理教育の現状と課題 - 中学校・高等学校での地理学習状況の分析を中心に -

- 辰巳 勝 (2005) : 高等学校で地理を履修したか? - 大学での受講生のアンケートから - .
地理 50-7, pp.42-47, 古今書院.
- 辰巳 勝 (2005) : 大学での「地理学」受講生の現状と講義内容. 近畿大学教育論叢 16-2,
pp.51-61.
- 辰巳 勝 (2007) : 社会科教育法における「地域調査」の実践について. 近畿大学教育論叢
18-2, pp.39-49.
- 戸井田克己 (2007) : フィールドワーク指導の課題. 『実践・地理教育の課題』, 小林浩二
編, ナカニシヤ出版.
- 西岡尚也 (2014) : 総括 地理で学んで欲しいこと. 新地理62-2, pp.57-58.
- 泉 貴久 (2012) : 地理教育の今後の方向性を考える - 新学習指導要領を踏まえて -. 新地
理60-1, pp.91-93.
- 吉水裕也 (2012) : 地域の形成プロセスを重層的に認識させる地理教育へ. 新地理60-1,
pp.83-84.
- 桜井明久 (2003) : 地理教育の将来と課題. 『21世紀の地理 新しい地理教育』, 村山祐司編,
朝倉書店.